



# 「対話力」とは何か

ただ  
孝志

皆さんが生活している地域で、外国の人々を見かけることは、まれではなくなってきたことでしよう。多様な文化や考え方、行動をする人々が、同じ地域でともに生活する社会、多文化共生社会が現実のものとなってきました。ですから、皆さんは、自分と同じ文化で育った人たちだけでなく、自分とは異なる文化をもつ人たちとも対話できる力を高めることが必要となってきたのです。

私は、このような多文化共生社会に必要とされるのは、「多様な人々と互いに意見を出し合い、対立や異なる考え方を生かし合い、一人では生み出せない新たな知恵や解決策を、共に創り出す」力、また、「話し合いのプロセスをおして、良好な人間関係をつくっていく」力と考えています。私は、このような力を「対話力」と呼んでいます。

多文化共生社会においては、「人と人とが理解し合う

ことは難しいのだ」ということを、まずしっかりと心得ておくことが大切です。日本人ですが、日本語でコミュニケーションをしていても、なかなか理解し合えないものです。ましてや文化の異なる人たちと、互いに理解し合うことは、より困難だといえるでしょう。

しかし、大切なのは、そこで諦めないことです。対話の困難さを互いが認めたからこそ、相手の発言内容でできるだけの確に聴き取ろうとし、自分の伝えたいことをわかりやすく伝える工夫をする。こうした努力をするこにより、少しずつであっても、互いの理解が深まっていき、相手からの信頼を得ることもできるのです。

ですから、このような状況においては、相手から批判されたり反対されたりしても、決して恐れることはないのです。確かに、人から批判されたり、反対意見を言われたりすると、心が落ちこんでしまうかもしれません。

でも、「自分の意見に反対された」「批判された」ということは、「自分の意見には反対されるだけの価値がある」ということなのです。相手の批判や反対意見を恐れず、むしろ、それらを出してもらうことにより、「自分の視野が広がって、相手との相互理解が深まった」、そう思える感覚を身につけることこそが大切なのです。

では、このような多文化共生社会において、対話力を高めるためにはどうしたらよいのでしょうか。

第一には、「自分の考えをもつ」ということです。ただし、自分の考えをもつためには、多少訓練が必要です。日頃から、さまざまな日常生活や社会生活上の問題や課題に関心を持ち、それらに対して、しっかりと根拠をあげて、自分の意見をまとめる訓練を、たくさんすることです。さらに、多様な視点から根拠をあげるように心がけると、説得力のある意見をもつことができます。初めは時間がかかるかもしれませんが、訓練を続けていくと、次第に、短時間で自分の意見をまとめることができるようになってきます。



第二は、人の意見をよく聴き、それをしっかりと受け止めることです。対話の基本は、「応答」です。短くてもよいから、とにかく言葉に出して応える習慣を身につけることです。ときには、うなずいたり、あいづちをうったりするだけでもよいのです。相手の伝えてきたことを、きちんと受け止めていることを、言葉や態度で示すことが大切なのです。国際的な会議などの場では、相手が語りかけているのになんの返答もしないということは、相手を無視したと受け止められ、失礼な態度だと捉えられかねません。どの地域の、どの国の、どんな意見にでも、相手が伝えようとしていることに対し、しっかりと応答を示すことは、国際社会における当然のルールなのです。また、相手の意見をしっかりと受け止めて聴いていると、「なぜそんなことを言うのだろう」「どうしてこんなことにこだわるのだろう」などと、疑問をもつことがあります。そのようなとき、相手の立場や心情などに思いをめぐらすことにより、言葉の背景にある、本当に伝えたいことを把握できるものなのです。また、世界の歴史、



文化、自然などについての自分の知識をもとに、意識的に広い視野に立つようにして、相手の発言の意図を考え、てみると、それまで気づかなかった、相手の話の真意が見えることもあります。

最後は、自分の考え方をしなやかに変化させる柔軟さをもつこと。相手から批判されるたびに、自分の意見を簡単に変えてしまうのはあまりよくありませんが、逆に、最後まで、決して自分の意見を変えないというのは、そもそも、人と対話をする意味がない。相手の意見に、「なるほど」と納得したら、逆に積極的にそれを生かし、新たな自分の意見を生み出していく、そんなしなやかな柔軟さを、互いにもつことが大切です。

「対話」の意義は、互いに、さまざまな意見を出し合い、よいところを学び合いつつ、さらにより結論を目ざすことにあるのです。

では、次に、「対話」をとおして、一人では生み出せない新たな知恵や解決策を、共に創り出すことを体験してみましよう。

**課題** 模擬国際環境会議を開き、論議し、地球環境に関する問題点や課題を明確にする。そのうえで、環境問題についての解決策を提言する。

### 学習活動の流れ

- 1 テレビやラジオの報道や新聞記事、書籍やインターネット等により、地球環境が抱えている問題を知る。
- 2 いくつかのグループに分かれ、一人一人が、さまざまな国の代表者であると想定して、異なる立場から地球環境についての意見を述べる。事前に意見のよりどころとなる資料や関係者の意見を収集・整理しておく。
- 3 各代表者の発言に対し、質疑応答をする。
- 4 議論した内容を生かし、環境問題のいくつかの解決策を創る。

### ポイント 多数決によらない解決方法

地球規模の環境問題を話し合う国際会議などの場においては、それぞれの国の立場で、鋭く利害が対立する場合も



多く、完全な合意を得ることは難しい。だからといって、このような場では、多数決で方向を決定する、という方法は不適切である。できるだけ広い視野から問題点を捉え、参加者一人一人が、少しでも歩み寄れる方向を、なんとかして見つけることが大切なのである。

国際会議のような場では、多数決で決定するのではなく、参加者一人一人が、ここまでならなんとか納得できる、と思える合意点を、対話をおして探ることが、会議を成功させるために必要なのである。

### ■意見の対立を調整・調和するための方法

立場によって、意見が対立するときは、どのように解決すればよいのでしょうか。例をあげます。

「部分合意をする」……全体的には対立していても、共通の利益がある事項を探し、その部分については、まず合意しておく対話の方法。

「留保条件を活用する」……利害が対立して、全体的な合意はできないが、ある条件をつければ互いに同意を得ることができる対話の方法。

「段階的な解決法」……今すぐには解決できないが、い

15

10

5

くつかの段階を設定して、一つ一つ時間をかけて合意を得ていき、やがて全面解決していく方法。

### ■問題解決の基本的なプロセス

さまざまな問題を解決するには、基本的なプロセスを知っておくとよいでしょう。

- ①何が問題になっているかを明確にする。
- ②関係者の主張を聴き、疑問点を質問する。
- ③解決策を共に創る意識を共有しておく。
- ④さまざまな解決策を出し合う。すぐに否定しない。
- ⑤対立状況にある関係者がどの案なら受け入れられるか、さまざまな案を作成し、検討する。
- ⑥実現可能性のある解決策を探す。
- ⑦解決策が有効かチェックする。



多田 孝志「一九四五」

山梨県に生まれた。教育学者。

著書に『地球時代の言語表現』『対話力を育てる』『共に創る対話力』『授業で育てる対話力』『対話型授業の理論と実践』などがある。

《出典》本書のために書きおろしたものである。